

## 世界の大都会・ビジネス都市「ニューヨーク」 フロンティア精神の創生（その1）

夢を富を追い新天地に集う人々、エネルギーに活動するまち、暮らしの質高め新たなステージへ

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

### はじめに

この地にやってきた人々の、**進取の気質・競争の精神**が、**社会の活力(ダイナミズム)**を生み、**近代的な産業や文化を創造**、**経済が隆盛**すると、世界の各地からさらに多くの人々がやってきて、この地は**世界の縮図(モザイク都市)**となる。

**多種多様(人種、民族、国、言語、宗教、価値観など)**な人々が、**フロンティア(新天地)**としての、この地に集結、人生を切り拓くべく力を発揮し、**近代的な価値(産業社会)**を創出、これが富を生むと、さらに多くの人々が集い、新しいビジネスを生み出すべく活躍するようになる、**ニューヨーク**はそんな**元気溢れるエネルギーな都市**である。

それでは世界の大都会、アメリカの中核・産業ビジネスのエンジンとして、近代社会を牽引する都市**ニューヨーク**を紹介しよう。



現在のマンハッタン



ウォール街証券取引所

### 1. 都市形成の歴史 移民によって創られたまち

#### (1) ニューヨークの生い立ち マンハッタンへの入植と開拓

ニューヨークの中心・マンハッタン(58 km<sup>2</sup>)、この地にはかつて緩やかにうねるようにして野原が広がり、その間を小川が流れ、小高い丘にはこんもりと森が広がっていた。「マンハッタン」とは、欧州の人々がインディアンと呼んだ、アルゴンキン族(ネイティブ・アメリカン)の人達の言葉で、「**丘の島**」を意味した。

1609年、**オランダ**の東インド会社(1602年に設立された世界最初の株式会社。新航路の発見、植民地の開拓・運営を業務とする。)に雇われた、イギリス人探検家で航海士の**ヘンリー・ハドソン**は、アジアへの近道となる航路を求め、この地に辿りつくと地形を調査・測量して回る。アメリカ大陸自体は、1492年に**コロンブス**により既に発見されており、**ニューヨーク**の存在も1524年に、**イタリアのヴェラツァーノ**によって見い出されていた。

「地方創生」支援プロジェクト



この時代、欧州は、東をオスマン・トルコに封鎖されていたため、西に活路を見出し、1613年にオランダ人ブロックが、この地に足を踏み入れる。ニューヨークが北米大陸の入口として選ばれたのは、大西洋を挟み欧州とは対岸に位置、大航海時代にあつて「不凍港」として、船が身を寄せる自然の港として地形がよかつたからである。

この時代、商業国家を目指す新興国オランダには、自由な雰囲気が漂つており、進取の気質に溢れるプロテスタントやユダヤ系の人々が、新天地を求めこの地に渡つてきた。1625年、オランダ人入植者がインディアンから、24ドル相当ともいわれる物品(短剣や布、ガラス玉など)との交換で、この地「マンハッタン」を買い取り(「使用権のみ譲渡」という説もある。)、**「ニューアムステルダム」**と名付ける。

これに続き 1634年には、ブルックリンへの入植も始まる。また、オランダの西インド会社(1621年設立)は、ブロンクスにも土地を購入する。さらに 1642年にはクイーンズにも入植が始まる。その後、オランダだけでなく隣国のフランスやドイツ、ベルギーなどからも入植が進み、1660年頃、マンハッタンの南端部に、彼ら商人の住宅が 200戸ほど建ち並び、小さな市場も立って港が築かれる。彼らはインディアンから家畜の略奪や自身の身を護るため、街の北側に**防護壁(wall→後にウォール街、形成へとつながる)**を巡らせる。



ハドソンの航海船「ハーフ・ムーン号」



1660年ロウア・マンハッタン

しかし、1664年になると、突如、**イギリスの軍艦**が現れ、この地は植民地と化してしまう。そしてイギリス国王チャールズ二世は、この地の統治を弟のヨーク公に任せる。すると翌年には市長が任命され、商品取引所が開設される。こうして、この地の名称はヨーク公の名を取り「**ニューヨーク**」と改まる。それから 20年ほどの歳月が経つた 1685年、ヨーク公は本国に戻り、ジェームズ二世として国王に即位する。この頃、イギリス人のほかフランス、ドイツ、北欧の国々からも移民が入り、アフリカからは黒人奴隷も連れてこられる。そうして 17世紀も末を迎えると、人口も 5,000人を数えるようになる。

これ以降、ニューヨークは 18世紀にかけ**港町**として栄え、17世紀に始まつたビーバー、カウソウ、ミンク等の**毛皮**、また食糧としての**魚**、そして**木材**などを輸出、またこれらの生活物資と交換する形で貿易が盛んとなり、海運業が発達する。しかし、この地を統治した**ヨーク公**が、**特定の言語や宗教を強要せず**寛容な態度をとつたため、この地では長いこと各国言語が入り乱

「地方創生」支援プロジェクト



れ、意思の疎通にも事欠く状況が続いた。しかし、1725年に新聞が、また1733年には週刊誌が発刊されるようになると、ようやく**米風英語が確立**、これが皆の間で共通に通じる言語となっていく。こうして人々間の**コミュニケーションがよくなる**と、次第に経済活動も盛んになり、1756年には人口も16,000人ほどに膨らむ。

この頃、本国イギリスでは、フランスとの間で植民地の争奪戦が激しくなり、財政が逼迫する。そこで本国は1763年、植民地に対する課税措置を盛り込んだ条例を可決する。この税負担の増加に抗議し、北米大陸ではアメリカ合衆国を組織、**独立戦争**へと進む。そして1776年には現在、歴史的建築物が多数集積するシティホールパークにおいて独立を宣言する。この独立戦争に勝利したアメリカは、1785年に、その首都をニューヨークに置く。しかし、ニューヨークが首都だった期間は、僅か5年ほどである。アメリカの首都は、その後フィラデルフィアを経て、新都市・ワシントンに置かれる。それはともかくとして18世紀末には、市の人口も6万人を超えるようになる。

## (2)移民入植の沿革 世界各地から集う

それではここでニューヨークを舞台にした、移民の入植状況について紹介しよう。18世紀までは、前章であらまし紹介したので、その後の動きについてふれることにする。ニューヨークへの移民は、アメリカが独立を果たし19世紀に入る前後から増加を始め、19世紀前半に産業革命の成果を取り入れ、経済が隆盛すると急激に膨らんでいく。

19世紀半ばの1845-49年にかけて、**アイルランドからジャガイモ不況に伴う飢饉を逃れ**、大量(100万人ほど)に移民が入り、多くの人がこの地に定着する。この時期、ニューヨークの人口の1/4はアイルランド人といわれるほどで、彼らは日雇いの土木作業員、工場労働者などとして働く。このあと、**ドイツ人が1848年の革命に失敗したり徴兵制から逃れる**ようにして入ってくる。彼らは小ドイツと呼ばれた**イースト・ヴィレッジ**にまず落ち着き、その後、各地に分散していくが、彼らは貿易商人、工場経営者などとして活躍する。この頃アヘン戦争の余波もあり、中国系の人々も入ってくる。彼らは、当初は鉄道建設や鉱山開発など肉体労働に従事した。

19世紀後半から20世紀にかけて(1880~1920)は、**イタリア(オリーブ、ぶどうの不作)やロシア、そして東欧(政治的迫害やテロを逃れ)**などから、**ユダヤ人(150万人ほど)**を中心に200万人ほどが、この地を起点として入ってくる。この時期、移民の多くを占めたユダヤ人は、半熟練ないし専門的な職業に就く。彼らは、20世紀に入る頃には、市の人口の1/4を占めるまでになる。彼らは**勤勉で教育熱心。やがて教育・医療、政治の分野などで活躍**する。1870年以降にやってきたイタリー人は、多彩な人々を包含しておりレストラン、建設業、トラック運送業など多種多様な職業に就き、着実に暮らしを築いていく。彼らは入植初期、マンハッタン南部のマルベニー通りを中心に**リトル・イタリー**を形成するが、イタリー人は、ある程度アメリカで過ごす、故国に帰国する者も多かった。ロシアや東欧の人々はブルックリンに住む人達が多かった。

ニューヨークに住む黒人は、南部から移住してきた人が多く、最近ではカリブ海諸国からの移

「地方創生」支援プロジェクト



住者が増えている。ニューヨークに入植した人々の多くは、まずは貧困の民としてロウアー・イーストサイドに定着、建設土工・工場作業員、日雇い労務者などとして働き、技能・知識・技術を身につけ生活水準が向上すると、後から入ってきた入植者に押し出されるようにして、北側の市街やブルックリンなど周辺の地へと移住、また人によっては新天地を求めアメリカ全土へと広がっていった。

現在のニューヨークの人口は約 840 万人で、人種構成をみると、白人が 33.3%、ヒスパニック系が 28.6%、黒人が 22.8%、アジア系が 12.6%である。近年の動きをみると、アジア系とヒスパニック系(メキシコ、プエルトリコ、ドミニカ、エクアドル、ペルー、グアテマラ、アルゼンチンなどのスペイン語圏の人々)は増加傾向を、黒人は減少傾向を示している。ヒスパニック系のうち半数以上を占めるプエルトリコ人の多くは、ブロンクスやマンハッタンのイースト・ハーレムに暮らしている。アジア系のうち、その 7 割ほどを占める中国人は、ロウアー・イースト・サイドのチャイナタウンやクイーンズに暮らす人が多い。

入植した移民のうち白人と黒人は、ニューヨーク市内で地域を別にして暮らしている。その他の有色人種は、それ以外の地域にコミュニティを形成しまとまって住むか、所得のレベルに応じ白人や黒人の暮らす地域に混じって暮らしている。マンハッタンの北端ハーレムや川を越えたブロンクスやブルックリンは、黒人の居住区となっているが、地価の高いマンハッタン中央部には、殆ど黒人は住んでいない。白人と黒人とはビジネス等で顔を合わせ仕事をする以外、日常的な交流はほとんどない。

即ち、彼らは、ニューヨークと一緒に住んでいるといっても、日常的には異なる文化圏に生活している。ここが「モザイク都市」といわれる所以である。一例をあげると、ニューヨークでは、地下鉄に乗っても車内は日本の大都市の鉄道のように、ぎゅうぎゅう詰めの混雑とはならない。少し肩が触れ合う程度の混雑さである。それ以上の混雑だと次の電車を待って乗車する。この例にみるように彼らは身体を密着させ、スクランブル状態に交わって生活することを好まない。ニューヨーク市民は、それぞれに間合いを計って暮らしている。



多人種・多民族構成のニューヨーク

## ○市街化の進展

18 世紀に入ると、移民人口の増加に伴いマンハッタンの市街は漸次、北側にシフトしていく。この時期、侵入防護のための北壁 wall は、市役所近くのチャームバー・ストリートまで北上して

「地方創生」支援プロジェクト





いた。この壁の北側が農村地帯で、南側が市街地である。

1830年に大火が起こり、富裕層は環境の良い場所を求め、今日ハーレムと呼ばれる所に転居するが、移民が増加し市街がさらに北へと広がる19世紀も末になると、この地には黒人が移住し、白人らはさらにその先へと転居、マンハッタンに未踏の地はなくなる。19世紀半ばから後半にかけては、産業革命の成果をふまえてアメリカ産業が発展、経済の隆盛もあり、職や所得を求め移民の数は急激に増え、市の人口は19世紀初め1800年の76,000人から、20世紀初めの1900年には337万人にまで膨れあがる。彼らの居住地は、イースト川の向かいのブルックリンなどへと拡大、これに伴い技術革新の成果もあり、橋やトンネルなどを介し各地域が陸続きになると、ニューヨーク市街は相互に連担し一体化する形で広がっていく。1898年に五区構成となった市の行政区域面積は789km<sup>2</sup>である。

## 2. 近代産業の興隆 産業を興し、富を生み、新ビジネスを創生

### (1) 産業の隆盛

ニューヨーク経済は19世紀に入っても、まだ**貿易・海運業**を主体に動いていたが、**航海術の進歩**もあって、イギリスまで2週間ほどで到達できるようになり、ビジネスのスピードが上がる。この頃、毛皮の貿易で繁栄を極めたジェイコブ・アスターは、市の人口が移民入植者により増加、マンハッタン市街が北へと伸びるのを見て取ると、新たに**不動産業**を興しデベロッパーとして開発事業を手掛けるようになる。

そうした中、イギリスからの独立を経て、市民の間では新産業・新ビジネス創生の意欲が、さらに高まりをみせる。ハミルトンがウォール街にニューヨーク銀行を設立し成功をおさめると、これに続き銀行のほか保険、証券の取引所が、かつて防護壁 wall のあった地域に建ち並んでいき、「**金融街**」を形成するようになる。

この時期、交通・輸送の発達も著しかった。1807年にフルトンが蒸気船を開発し、1825年にハドソン川と五大湖とを結ぶエリー運河が開通すると、大陸中西部に産する穀物や石炭などの燃料が、ニューヨークまで運ばれてくる。また1832年には、マンハッタンにも鉄道が通じ、蒸気機関車によって物品の大量輸送が可能になると、ニューヨークは欧州と米国本土とを結ぶ、「**港湾都市**」として大いなる繁栄を始める。

人口の集積や産業の発展に伴い、ニューヨークは井戸水の供給が逼迫してくると、1840年頃には50 km離れたウェストチェスターの地にダムを築き、水路(鉄製のパイプライン)で水を引くようになる。

「地方創生」支援プロジェクト



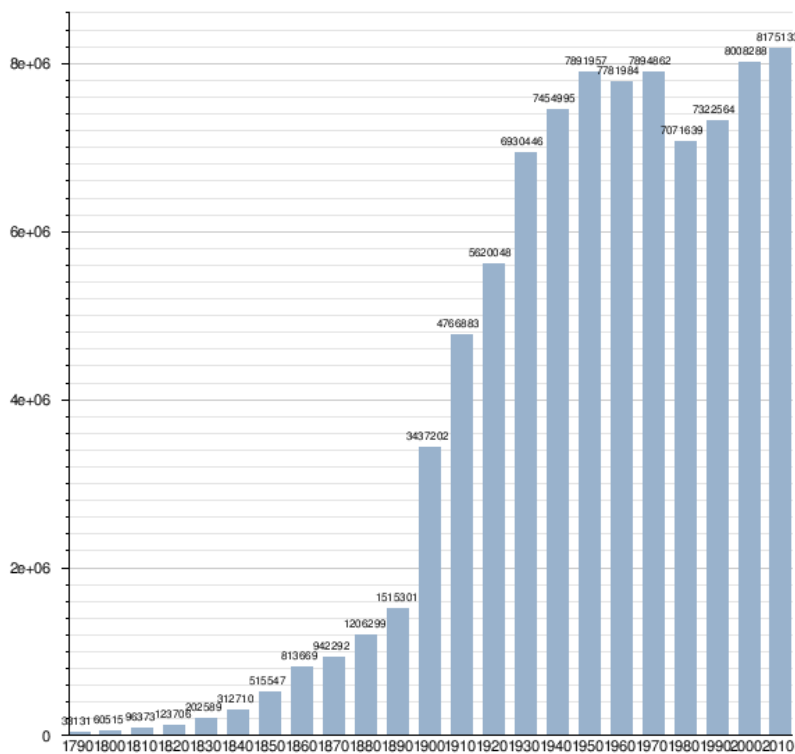
### コラム「産業王の誕生」

19世紀、産業革命が起こると、南北戦争に伴う軍事特需を契機に、資本主義が勃興する。即ち、鉄道事業の発達が見られ、これと相前後しアンドリュー・カーネギーが製鉄業を、ジョン・D・ロックフェラーが石油精製業を、またトーマス・エジソンが電力業を、といった具合に資源・エネルギー関係の産業が、次々と興り隆盛していった。鉄は、やがて当初の鑄鉄製品から、錆が出ず丈夫で強固な鋼鉄(スチール)へと変わり、長大な橋梁の建設や建築物の高層化が可能となった。

また、鉄道王と称されたヴァンダービルトは、鉄道を活用し陸軍の輸送に関わることで巨大な財を成す。アメリカには、王様はいないが、それぞれの産業単位に、その立役者として君臨し栄華を極めた人達がいる。鉄鋼王のカーネギー、鉄道王のヴァンダービルト、石油王のロックフェラー、発明王のエジソンが、その人であり、この他にも石炭王のヘンリー・フリック、自動車王のヘンリー・フォード、金融王のJ・P・モルガンなどがあげられる。

彼らのうちには財閥を形成し、経済面だけでなく政治の面においても影響力を行使する者が現れてくる。

### (2) ニューヨークの人口推移



ニューヨーク市の人口推移



マンハッタンの主要な地区

「地方創生」支援プロジェクト



1890 年頃までは、通常の人口増加の動きにあわせ、経済成長を遂げていたニューヨークであるが、この時期を過ぎると人口は目に見えて増加する。この頃、産業革命の成果が各分野に波及、技術革新や経営刷新も進み、大量生産大量消費に向け社会基盤が整っていった。そうして生産の担い手である、労働者が不足していたところに、欧州などから様々な理由で移民が大挙して入ってきたため、この地の生産力は飛躍的に向上する。こうして経済が隆盛すれば、富を求めさらに移民人口が増加する。二つの世界大戦を経験(第一次世界大戦は直接的な戦闘への参加はなく、戦争で生産力の落ちた欧州に対し不足する物資の供給に努めた。)した 20 世紀前半は、ニューヨークが最も輝いた時代である。

しかし、1960 年代に入ると、モータリゼーション化が進み、良質な住環境を求め住宅地が郊外化する動きもあり、中心市街の治安が低下、また老朽化した古い住宅のアメニティが低下したことも影響し、市は人口減少に見舞われる。この傾向は 1980 年代まで続いたが、その後、防犯対策に努めるなどして、都心居住の質を高めていくと、20 世紀の終盤あたりから人口は回復傾向を見せるようになる。

### (3)市民の価値観

1886 年にフランスより贈呈された自由の女神像に象徴されるように、移民によって形成されたアメリカ的価値観「自由、公平、民主、自治」が、イギリスにおける産業革命の影響を受け、時代精神としての近代化スピリッツを涵養、これがこの地で大きく育ち続々と新産業の萌芽をみる。この地では第一次世界大戦を契機として、近代産業が大いなる経済発展をもたらした、その果実をもって 20 世紀という時代、政治経済社会の全般にわたりバックスアメリカーナを実現、アメリカは世界を席卷していった。これは先に述べたアメリカ的価値観・行動原理(即ち、移民文化)が、地球社会の近代化・産業化の動き、即ち、工業社会の形成に最も良く適合していたということである。

アメリカに新天地を求め世界各地からやってきた移民は、この地・アメリカに知的革新(発見・発明、産業・ビジネスの創出)を生んだだけでなく、多くの労働力と新たな市場をももたらした。また、アメリカには王様もなく貴族階級も存在しないことから、社会の保守化傾向は弱く、また各地で個人の自由な行動が尊ばれ、社会主義的な思想は忌避されたため、革新的でエネルギー的な活動が展開され、近代産業は大いに発展していった。

現在、ニューヨークには、人種、民族、出身地などが異なる多数の人々が暮らしており、彼らの間では 170 もの言語が話されている。こうした多種多様な人々を包み込んで活躍へと導く**アメリカ的価値観**、「自由、公平、民主、自治」の近代化精神は、このフロンティアの大地(ニューヨーク)に、大変良くフィットしていた。

人は、それぞれ異なる事情で、この新天地に流入、この地で夢と希望を描き、そして教育を受け職を得て活躍の場を求め、新たなスタートをきる。進取の気質に溢れるこの地の人々は、移民

「地方創生」支援プロジェクト



文化として形成された近代化精神を発揮し、新たな発見・発明を次々と成し遂げていった。そしてその成果を適用し近代産業を興し、雇用の場を広げるとともに生活の利便性を高めるべく、新たな物品を次々と生産・供給していった。こうして社会の富を創出することで、世界からさらに多くの人々を集め、クリエイティブな活動領域を広げ、新たなビジネスを創出していった。

即ち、ニューヨークの先人たちは、最初はこの地で採取される天然素材、自然資源を用い貿易業などを営んでいたが、やがて石炭、製鉄、石油精製など資源・エネルギー関連の産業を興し、産業の種を育てるとともに、蒸気船、蒸気機関車、自動車、飛行機等々の輸送機関を創出、あわせて、道路、鉄道等の社会資本の整備を進めた。その一方で知的基盤を整え技術開発、経営革新（生産方式、経営組織など）を成し遂げ、生産効率を高めると経済が大いに発展、この地に富が集中してくると、さらに多くの人々が集い大きな市場が形成されていった。そして富を蓄えた人々が、教育・文化、医療・福祉などの分野で、社会基盤を整えるべく寄付行為を広げていくと、市民はより健康的に、より知的になり、産業経済や生活文化がさらに発展していった。



独立 100 周年記念・自由の女神



産業都市の象徴・ブルックリン橋



五区構成のニューヨーク

## 参考図書等

猿谷要：「世界の都市の物語」ニューヨーク 文藝春秋 1992

亀井俊介：「ニューヨーク」 岩波新書 (株)岩波書店 2002

小林克弘：「ニューヨーク・摩天楼都市の建築を辿る」 建築巡礼 44 丸善(株) 1999 年

あっとニューヨーク <http://www.at-newyork.com/new-york-history/>

ウィキペディア「ニューヨーク」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

大和則夫：Times Square:公共空間における新たなパラダイム (一財)森記念財団都市戦略研究所 2015

高橋英樹 「官民パートナーシップによるまちづくり」 埼玉県ニューヨーク事務所 2009

<http://www.city.osaka.lg.jp/shikai/>

ニューヨーク事務所 「廃線を活用した都市公園開発」 CLAIR REPORT (財)自治体国際化協会 2014

<http://www.clair.or.jp/>

「地方創生」支援プロジェクト





小山くにひこ・西沢けいた 平成 26 年度海外調査報告「ニューヨーク」 p.8-49 東京都議会 2014

<http://www.gikai.metro.tokyo.jp/>

青山公三 「官民連携 (PPP/PFI) 事業の推進に向けて」先導的な事例に学ぶ PPP/PFI セミナー 国土交通省 2015

<http://www.rice.or.jp/archive/pdf>

## 掲載写真等

現在のマンハッタン <https://www.ana.co.jp/wws>

ウォール街証券取引所 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ハドソンの航海船「ハーフ・ムーン号」 <http://www.at-newyork.com/new-york-history/>

1660 年 ロウアー・マンハッタン <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

多人種・多民族構成のニューヨーク <http://hipstergate.jp/wp-content>

ニューヨーク市の人口推移 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

マンハッタンの主要な地区 <http://nyliberty.exblog.jp/iv/detail>

独立 100 周年記念・自由の女神 <http://worldtenki.net/>

産業都市の象徴・ブルックリン橋 <http://matome.naver.jp/odai>

五区構成のニューヨーク <http://blogs.yahoo.co.jp/luiluicom>

1811 年の委員会 計画草案 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

セントラルパーク <http://livedoor.blogimg.jp/plmh>

ニューヨークの地下鉄路線網 <http://pandapanda.meblog.biz/article/>

T 型フォードの生産ライン <http://www.afpbb.com/articles/>

ニューヨークホテル <https://dawsonlinton.files.wordpress.com/>

1932 年のミッドタウン <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

エムバイアーステートビル <http://www.at-newyork.com/new-york-history>

クライスラービル <http://blogs.yahoo.co.jp/world>

ロックフェラーセンター <http://image.search.yahoo.co.jp/>

国連本部ビル <http://www.at-newyork.com/new-york-history/>

タイムズスクエア B I D 地区 <http://www.mori-m-foundation.or.jp/pdf>

再生なったタイムズスクエア <http://sekaiichiweb.com/>、<http://www.web-across.com/>

新しいプログラムによる高質な住宅供給 <http://www.mlit.go.jp/common>

[http://www.clair.or.jp/j/forum/c\\_report/pdf](http://www.clair.or.jp/j/forum/c_report/pdf)

再生された都市インフラ・ハイライン(空中緑道公園) <http://www.newyorkcity.fr/high-line-park-new-york/>

テロで炎上する世界貿易センタービル <http://image.search.yahoo.co.jp/search>

新しく建設されたワン・ワールド・トレードセンター <http://toolbiru.web.fc2.com/topic/>

マンハッタン島を中心としたニューヨーク <http://ptdny.blogspot.jp/>

「地方創生」支援プロジェクト

